

# いの流水俳壇

松尾 満津於選

## 「当季雑詠」

青柿や落ちて動かず母が逝く

友草 水月

〔評〕柿の季語は秋だが、青柿は夏の柿、突然にドスンと音たてて落ちる。句に出てくる母親は明治生まれ、百歳の天寿を全うした大往生であつた。

感性を示すみずみずしさ、感情を表に出さない詩情はまことに見事。この葬儀に列席させていただいたが、はじめて接するその静かな眠り、皺のない安らいだ顔が幾分丸味を帯び、現世に百年生きた別れを告げているように見えた。その静かな眠り。親の死を見つめてのこの冷靜な表現、見事な措辞である。

乳母車つれ戻り来し青田風

津田 久美

〔評〕田植えした稲の苗が一面に青々となつた田を指して、青田という。本来は幼児をのせて運ぶのが乳母車であらうが、この車には幼児が居ないような気がする。いろいろの家庭用雑貨を積んで畦道を帰って来たのであらう。漸く暑さを感じる頃の青田風。情景の輪郭がしつか

り捉えられ、平和な家族を連想させられる。

老鶯や竹の葉ゆれて鳴き交わす

弘瀬うき子

〔評〕老鶯は夏の鶯である。春の鶯はまだ鳴き馴れてないということもあつて、ときには変な鳴き方をするが、老鶯ともなれば鶯らしいたしかな鳴き方になる、竹藪などに鳴き交わす様子には、何となく平和な感じがする。

病む父に七十三の夏長し

立木ゆう子

〔評〕父親の病気が何であるか憶測するほかはないが、そう簡単に治る病気でもなさそうである。現今の七十三歳は必ずしも老人ではなく、矍鑠として居る人も居る、早く能くなつて……と父を氣遣う娘、心情の吐露である。氣候のよくなる秋が待ち遠しい。

水潤れて棚田に稲の悲鳴聞く

森岡 照月

〔評〕今年の梅雨は記録的といわれる程に雨不足だった。地域によって差はあつたが、梅雨入り当時の高知県は特に酷かつた。「空梅雨やダムの底より旧庁舎」この句は土佐町早明浦ダムの入梅当時の、渇水状態を明示した句であるが、水不足を解消するための対策として設置されて

も、現実には人智の及ばないところで裏切られる。生きている限り「いたちごと」は続く。

聞き返す事多くなり梅雨ぐもり

岡本とも子

手の平の間に螢火浮かびけり

大川 節弥

軒先に吊りし風鈴ひるがえる

片岡 包女

巻き戻す記憶の川に螢とぶ

刈谷 志津

控え間に紫陽花活けし寺に座す

川村 博子

どんよりと思わせ振りな朝雲

竹崎 光子

口中に飴をころがせ梅雨ぐもり

井上 郁子

統合をされし母校の蟬しぐれ

間 浩太

落し文征さし夫からも知れず

川村千図子

夏山の深く昔の憩ひ石

川上こよね

うとうとし寢覚めの悪しき暑さかな

小島 良

野分き去り底抜け青き空残る

森元二美子

炎昼や猫も日陰を求めおり

楠目 哲郎

田草取り腰を伸ばせば雨上る

筒井 眉躬

過疎村の里に広がる青田かな

筒井 一平

ひぐらしの声にせかれ厨ごと

筒井 文

一品は熱きをもつて夏料理

伊藤 たみ

麦こがし懐かしきかな水車小屋

川村 愛

一と場所を占めて譲らず鮎の川

松尾満津於

## 今月のことも川柳

車より友だちに付きたいナビゲーション

伊野小4年 西本 あみ

お年より何でも分かる博士だよ

神谷小4年 坂本 志織

たべものは大事にしう命のもと

神谷小4年 野口 瑞絵

大切な地球を守ろうぼくの手で

下八川小5年 大久保貴史

クーラーはすずしいけれど温暖化

伊野小6年 川村沙耶香

プールをねしたあとなぜかあつたかい

伊野小6年 弘井 七帆

投句先  
吾北教育事務所 上八川甲2010  
☎ 867-2133

次 題 「当季雑詠」  
締め切り 毎月15日